

信州大学教育学部附属松本中学校1年B組 自然グループ

松枯れから森林を守るために

附属松本中学校1年B組の自然グループでは、地域の自然を守ることを目標に、「松枯れ(まつがれ)」という現象に着目した探究学習を行いました。自然を大切にする心と、持続可能な地域社会を実現する行動力を育むことを目的に、調査・フィールドワーク・ものづくりを一体化させた活動を展開しています。

松枯れ被害の現状と課題

松枯れは、松に寄生するマツノザイセンチュウが、松くい虫と呼ばれるマダラカミキリを媒介にして拡がる感染症です。近年、地球温暖化の影響で寒冷地の松本地域でも発生が確認されるようになり、生態系のバランスの崩壊、景観の悪化、木材生産への打撃といった深刻な影響が生じています。

鳥と森の関係に着目した解決策

児童たちは、松枯れの拡大を防ぐ方法として、松くい虫の天敵となる鳥たちが暮らしやすい環境を整えることに着目。あがたの森公園での調査や、地域住民との対話を通して実態を把握した上で、巣箱を手作りし、公園内に設置する活動を行っています。

巣箱の材料には、松枯れによって伐採されたアカマツやカラマツの端材を使用。協力を仰いだ柳沢林業の方の「端材という木はない」という言葉に感銘を受け、木の命を無駄にしない取り組みにもつながっています。

未来への展望

松枯れ予防を起点とした自然保全活動を通じて、児童たちは「小さな行動が環境を守る一歩になる」ことを実感しています。今後は、巣箱の設置後のモニタリングや、被害材の活用による小物づくりにも挑戦していく予定です。地域の自然を守る活動が、次の世代へと受け継がれていくことを願っています。